髪型による小顔錯視効果の検証

村尾　崇実

自身をよりよく見せようとするための道具としての有効な方法のひとつが、ヘアスタイルである。1980 年代以降、おしゃれに関心の高い若者層で小さな顔（小顔）が流行しており、女性誌では顔が小さく見えるヘアメイク術が頻繁に特集されている。しかし、これらのテクニックは美容師らの個人的な経験によって提唱されているものが多く、その知覚効果が科学的に検証されることはほとんどなかった。本研究では一般に小顔に見せる効果があると言われている髪型を取り上げ、その小顔効果を心理物理学的実験により検証した。

実験Ⅰでは、「前髪を横方向に直線的に切りそろえていると本来よりも顔がワイドに見える」というヘアメイク術の効果を検証した。そのため、前髪の切りそろえラインの横幅と、切りそろえラインの直線性（連続性）が操作された。各試行では、髪型が操作された標準刺激と、顔幅が操作された比較刺激がコンピュータ画面上に提示された。実験参加者はそれらのうち、より「スリム」に知覚される方を選択した。主観的等価点は上下法によって推定された。実験の結果、知覚される顔の大きさは、前髪の切りそろえラインの幅によって異なるとはいえなかった。また、切りそろえラインが中央で分割された条件において有意な顔の過大視がみられた。これらの結果は単純な幾何学的錯視では説明しにくく、顔の形状知覚に特有の知覚現象である可能性が示唆された。

実験Ⅱでは、「前髪の横に長い毛束を設定すると小顔に見える（触角ヘア）」というヘアメイク術の効果を検証した。そのため、毛束の角度・長さが操作された。触角ヘアには顔の頬の領域を分割し、顔を本来の大きさより小さく知覚させる効果があると考えられることから、顔幅を分割するバイカラー錯視および縦長ライン強調効果の組み合わせによって小顔錯視が生じると予想された。実験の結果、触覚が顔輪郭のやや内側にあればスリムにみえるが、内側すぎると逆に顔の過大視が起きることが明らかになった。この原因として、バイカラー錯視は「分割」ではなく区切り線への「同化」によって起きるものだと考えられ、分割線が太くなければバイカラー錯視は生じず、単純な分割の錯視が生じると推察した。一方で、触角の長さに関しては、触角が長い場合、すなわち髪の顔領域の遮蔽率が高い場合により顔がスリムに知覚された。この結果は先行研究と同じくアモーダル補完の効果であると説明することができた。

以上の実験により、一般に提唱されている小顔見せテクニックで一概に心理物理学的に小顔錯視効果が生じるわけではないとわかった。また、髪型による小顔錯視は先行研究が示した「髪が肌を遮蔽する比率の増加」のみによって起きるのではなく、また別の錯視が生じた、あるいは複数の錯視が同時に生じた結果であると示唆された。（基礎心理学）